

資料

徳山ミサヲ遺品短歌の時代区分と心情の整理
 一障害の孫, 福祉行政, 自らの老いに関するミサヲの心情に焦点を当てて一

丸山昭生*・小杉敏勝**・笠原芳隆**

1 はじめに

徳山ミサヲ(図1)は、障害のある孫の誕生を契機として、障害児のための療育機関設置運動を展開した。この活動資金を得るための具体的手段として、婦人会を中心に会員一人当たり米一升、またはそれに相当する125円(当時)の寄付を募り、総額500万円の基金を集めたことは、「米一升運動」として今日まで語り継がれている。この運動は、新潟県立高田養護学校(現新潟県立高田特別支援学校)の創設に繋がったが、その道のは大変厳しいものだった。

ミサヲは歌人であったので、当時の心情を短歌(以下、歌)でよく表しているが、新潟県立高田養護学校周年記念誌からもその心情を多く読み解くことができる。

ところで、ミサヲの未発表の歌が徳山隆秀氏(ミサヲの孫、西念寺現住職)から筆者らに提供されたことを契機に、筆者らは彼女が詠んだ歌から、「障害のある孫への想いを読み解く」という試みを行い、それを当センター紀要第27巻で報告したところである。

ミサヲの詠んだ歌は膨大な数で、第27巻で示したように発表作品は約2,200首、遺品作品は約5,600首で、総計7,000首を越える(遺品作品には発表作品の一部や草稿中の作品と思われるものも含まれる)。

今回は、膨大な遺品作品の中から、本稿のテーマに関連した遺品作品の時代区分と、その時々ミサヲの心情の整理を行った。母親代わりとして障害のある孫育てに苦勞する姿、養護学校卒業後に孫の社会参加で共に悩む姿、自らの老いを孫との関わりの中で詠んだ日常の姿等約300首余を抽出した。そしてミサヲの心情の変化を類型的に整理・分類し、若干の解説を加える試みを行った。



図1 徳山ミサヲ(西念寺提供)

2 遺品作品の出典の整理

ここでは、遺品作品(図2, 3)すべてを対象に年代ごとに整理・分類を試みたので、その結果を述べる(広告の裏面等に走り書きした解読が困難なものは省いた)。遺品作品は、ミサヲ自身がまとまりごとに標題を付していたものがあったので、それを基にほぼ年代順に整理してみた(便宜上単位を「冊、綴り」とする)。

(1)「教ふる者の手記」(昭9) 1冊35首

ミサヲは新潟県長岡女子師範学校を卒業(ミサヲ19歳)後、大正6年から25年間、女教師として県内の小学校に勤務した。その時代のものと同量される歌で、歌人として読んだ早期のものである。

(2)「祖母が嘆き」(昭33.4) 1綴り24首 ミサヲ60歳 孫1歳

昭和31年8月に障害のある初孫が誕生した。孫の障害につい



図2 遺品作品の数々

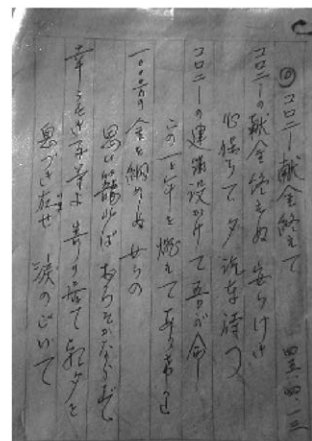


図3 「コロニー献金終えて」の直筆の歌

* 前新潟県立高田特別支援学校

** 上越教育大学

てその診断を得ようと聖路加病院に入院したが、生母が失踪しミサヲはダブルパンチを食らう。その心の嘆きを詠ったものである。

(3)「灯求めて」(昭34.3) 1綴り44首 ミサヲ61歳 孫2歳

引き続き、孫の診断を得ようと新潟大学医学部に数日の検査入院をした。そこで「先天性脳性麻痺」の診断を得て衝撃を受ける。

(4)「古歌集『旅の歌』」昭和35年ころか。1綴り165首。その中の「言語障害の孫と共に100首(新潟はまぐみ学園に入りて歌える)」(昭35) ミサヲ62歳 孫3歳

脳性麻痺の診断を得てその改善を目指し、ミサヲは母親代わりとなつてはまぐみに母子入園する。まるで世捨人のような気持ちではまぐみに籠ったのだが、そこで見る光景に心を奪われる。

(5)「夫にささぐ『手向草』」(昭38~39) 1綴り200首 ミサヲ65~66歳 孫7~8歳

夫秀雄とは大正11年4月に結婚し42年間連れ添ったが、彼は昭和39年1月に69歳で永眠した(ミサヲ66歳)。障害の孫の養育にミサヲと手を携えて取り組んでくれた人だった。ミサヲが障害児のための療育機関を作ろうと婦人会の先頭に立っていた時でもあったのだが。

(6)「秋にうたえる」(昭42.10) 1綴り44首 ミサヲ69歳 孫11歳

ミサヲは四季の移ろいをよく歌に詠んだ。秋の情景はミサヲが好きな対象だが、そこに障害の孫が重なる。

(7)「コロニー献金終えて」(昭45.4) 1綴り4首 ミサヲ72歳 孫13歳

「米一升運動」を終えて、昭和43年(1968)5月に新潟県立高田養護学校の創設を迎えたミサヲだが、社会福祉事業にも深い関心を寄せた。障害者の福祉向上のために「コロニーにいがた白岩の里」建設に関わったことを示す歌がある。

(8)「宿業」(昭45.5) 1綴り18首 ミサヲ72歳 孫13歳

障害の孫の誕生は「宿業である」と、心の底にずっと捉え続けていたミサヲ。その心の痛みは、孫が大きくなっても時々頭を過る。

(9)「コロニー起工式にゆく途」(昭45.6) 1綴り18首 ミサヲ72歳 孫13歳

コロニーの起工式に向かう途中、自然の情景の中に幸せ薄き子らを想いながらも、彼らの将来の道に灯も見える。

(10)「北海道の旅」(昭46) 1綴り150首 ミサヲ73歳 孫15歳

宗教関係や歌人関係の人たちと、ミサヲはよく旅をしている。その旅先で障害のある孫のことがふと頭を過る。

(11)「コロニー開所式に臨みて」(昭46.8) 1綴り8首 ミサヲ73歳 孫14歳

ミサヲはコロニーの建設委員として関わっていたようだ。障害のある孫は、将来ここに托さなければならぬのかと考えたりもした。

(12)「旅の歌(2)」(昭46.6) 1綴り129首 ミサヲ73歳 孫14歳

旅の歌の(1)は不明、(3)にはテーマに関係する歌は無

い。なお、「旅の歌(2)」には、「コロニー見学：養護学校PTA」を含む。

コロニー開所後の10月、高田養護学校PTAは「コロニー見学」を行っている。ついでに弥彦詣でをするのだが、同行する親たちの表情が詠まれている。

(13)「雑詠(1)」(昭46)「雑詠(3)」(昭49) 2冊67首 ミサヲ73~76歳 孫15~18歳

便箋に書かれたものがそれぞれ1冊にまとめられている。「雑詠(2)」にはテーマに関する歌は無い。孫の思春期の心の乱れを読んだり、養護学校中学部卒業後の就労での混乱を詠んだりした歌が多い。

(14)「暁の鐘」(昭52~58) 7冊496首 ミサヲ79~85歳 孫21~27歳

原稿用紙に書かれたものが7冊にまとめられている。ミサヲ自身の高齢化を憂いつつも障害の孫の将来が気になる歌が多い。

(15)「孫」(昭53.5・昭56.2) 1綴り15首 ミサヲ80, 83歳 孫21, 24歳

時々、障害を背負った孫のことが気になる。「孫」を標題にした作品群である。

(16)「旅の歌日記」(昭53~平元) 1綴り280首 ミサヲ79~91歳 孫22~32歳

前述したように、ミサヲは色々な仲間と多くの旅をしている。旅先は、駿河伊豆、富士、寧来(なら)、みちのく、筑紫、伊勢志摩、京、四国、大阪、小豆島、アメリカ西海岸と多方面に亘った。旅仲間は、退職女教員会、婦人会、歌人会、謡曲の会、宗教関係等である。そしてその旅先でも孫の影が過る。

(17)「山陰山陽の旅日記」(昭55ころか) 1綴り750首 ミサヲ82歳 孫24歳

上記で述べた旅の様子を詠ったもの。作品数が特段に多い。

(18)「永き別れ」(昭56.2) 1綴り18首 ミサヲ83歳 孫24歳

母親代わりのミサヲは、自身の死後の孫を案じていた。

(19)「初秋の譜」(昭56.8) 1綴り13首 ミサヲ83歳 孫24歳

「秋にうたえる」(6)に相当する歌である。

(20)「詠草『病床記(二)(三)』」(平元~6) 2綴り136首 ミサヲ91~96歳 孫33~38歳

ミサヲは老いても同人誌「北潮」への投稿は続けた。病床にあっても作歌の意欲は衰えなかったようだ。その草稿中のものだが、投稿につながった歌もある。病床記(一)にはテーマに該当する歌は無い。

(21)「来し方(一)(二)」(平7) 1冊612首 ミサヲ97歳 孫39歳

雑記・歌川衣子(ミサヲの歌人としての号)でノート一冊にまとめられたものである。人生の最期を感じながら、障害の孫や、自身が手掛けた上越婦人会館、高田養護学校に気持を馳せる。

(22)「^{おもひ}老いの情(歌の1節から著者命名)」から(平8~9) 1冊1,029首(ミサヲ98~99, 孫40~41)

悪態をつくことも多い孫だが、彼の作る卵焼きやお粥一椀に命を繋ぐことに感謝する。白寿となり、やがて百歳を迎えた。

年を重ねることは侘しいが、ただ「佛のはからい」でつつがなく生き延びていることを喜ぶ歌などが多い。

(23) その他 約1,200首

分類の対象として上記以外の作品にも当たったが、本稿のテーマと関係する歌が発見されなかったもの全てをその他とした。

3 時代区分とミサヲの心情に焦点を当てた整理・分類

上記のとおり、遺品作品約5,600首の出典の整理を経て、本稿テーマの視点から約300首を抽出し分類することを試みた。抽出作品は、障害のある孫を詠んだ歌が中心だが、障害と直接関係ない女教師時代に教え子を詠んだ歌、障害者福祉事業に関する歌、また孫の社会参加の難しさを自身の老いと重ねながら読んだ歌などである。

抽出作品は筆者らが相談の上、ミサヲの人生を大きく時代区分した後、その下位区分として位置付け、その時々々のミサヲの心情をもっとも如実に表現しているキーワード（○印）で整理・分類した。

以下、時代区分と下位区分名を示し、その代表歌を例示して若干の解説を加える。

(1) 教職時代（大正6（1917）年、ミサヲ19歳～）

○ 教え子は愛しい：か弱き教え子たち（「教ふる者の手記」から2首抽出）

「ひもじきに共に縄飛ぶ子を見つゝ、何か悲しく涙こぼるゝ（欠食）」「いと冷えし手かなと吾手持ち添えて 温ためやればこの日やさしき」

遺品作品「教ふる者の手記」（昭和9年）には、ひもじさや寒さに耐える子どもへの、教師としての愛情がにじんでいる。ミサヲは新潟県長岡女子師範学校を卒業（ミサヲ19歳）後、大正6年から25年間、女教師として県内の小学校に勤務した。その時代のもとの推量される歌で、歌人として読んだ早期のものである。直接孫に関係する歌ではないが弱者への想いが感じられるので抽出した。

なお、歌集「来し方」昭和50年（図4）の「香かなる思出」には、女教師時代に教え子に寄せる想いを詠んだ歌が十数首載

せられているが、ここでは省略する。

ミサヲは家庭の事情で家督（寺）を継ぎ、大正11年4月に他寺の二男（秀雄）を婿養子に迎えて結婚するが、その後本堂の焼失により、その再建等の理由で昭和17年教職を辞している。そして、戦時下で二男が海軍兵学校後任官する中、無料の季節託児所を開設した。この託児所はその後通年の保育園となった。ミサヲは上記の社会貢献活動のほか、その後婦人会、退職女教員会、歌人会、謡曲の会、障害者福祉の活動等にも携わっていくことになる。

(2) 障害のある孫の誕生で心揺れる時代（昭和31（1956）年、ミサヲ58歳～）

○ 嘆き：障害のある孫の誕生（「祖母が嘆き」から18首抽出）

昭和31年8月27日、ミサヲとその家族に突然の不幸が訪れた。初孫の秀顕（長男文秀の第1子）が難産によって障害児（後に先天性脳性麻痺と診断）として誕生したのだ。ミサヲは孫を抱きながら、夫に口説くことしきりだったという。前稿でも触れたが、夫は「泣くな嘆くな。どうにもならぬわれわれの宿業なのだ。業を果たしつづ前進するのだ。涙をぬぐってこの子の前途を拓いてやろう」とミサヲを力強く励まし、彼女は夫の言葉に幾度も涙をぬぐったという。

その孫の様子を詠んだ歌である。

「わが祖母と知るや知らずや圓眼（つぶらめ）に 孫（こ）は見つめたりいぶかしみつつ」

孫の障害の診断や治療にと聖路加病院を訪れるのだが、そこで更なる不幸が襲う。生母が失踪したのだ。この件に関するミサヲの心情を吐露する歌も数首ある。

「母なき子となりけるか秀顕は 何たる星の下に生（あ）れにし」「妻去りて独りとなりし文秀の 癒ゆることなきいたで悲しも」「その母はその子と夫（つま） この家（や）再び踏まじと断ず」

そしてミサヲは、母親のいない障害の孫をわが手で育てることを決断する。

「その母は子をおき去りぬ親のなき 孫を育つと祖母吾が辛き」

なお、その後文秀は栄子と再婚することになる。

○ 灯はないか：障害の病原をさぐる（「灯求めて」32首抽出）

障害の病原をさぐるため病院巡りをするが、診断に身を曝す孫の姿は哀れだ。しかも、灯はなかなか見えない。

「運搬車に乗せられしまゝ幼きは 放射線科に脳を曝さる」
「麻醉薬嗅ぎ死人のごときその脊なの 髓の中より水を吸はるゝ」
「精神科、耳鼻科、脳外科、整形と 経巡り歩き病原さぐる」
「病原は遂につかめずそのまゝの 不憫さ抱き宿に帰るぬ」

ミサヲの言う病原はなかなか掴めなかったのだが、その後、新潟大学医学部の病院でついに診断が下る。その時のミサヲの心情は、歌集「来し方」によれば「先天性脳性麻痺の診断は鉄槌のごと脳天を打つ」ということになり、灯は遠のくのである。

○ 籠る：リハビリのため「はまぐみ母子入園」（「はまぐみ学園に入りて歌える100首」から95首抽出）



図4 歌集「来し方」

孫の障害に診断は下されたが、母なき子をどのように育てればいいのか。ミサヲが決断したのははまぐみ母子入園であった。「世捨て人にも似た気持ちで訓練の為に籠り、さみしい歌を詠み続けた」（歌集「来し方」とある。

この母子入園はミサヲにはとても強烈な体験だったようで、歌の数も多い。歌集「来し方」には「はまぐみ日記」として50首収録されているが、遺品作品にも約100首が発見された。

そこでの子どもは、知的障害、言語障害、肢体不自由（ミサヲはこれを三重苦という）など様々な様相を示していた。また、付き添いの母親たちの様子をも詠んだ。

「見かえせばいたく冴えたるまなざしす 痛ましきかも両杖に佇ち」
「足萎えの子は子をかばひいたはりて 足ひきずりて寮に寝にゆく」
「此の朝は皆一様に着替えて おのおもの杖によりたる（裏の松原にて運動会）」

はまぐみでの親たちの振る舞いは、ミサヲの心情とも重なる。

「その母は足たじ垂るゝ子を負ひて 洗面所の陰に涙のごえり」
「力つき弱り果てしも吾子故 涙のごいて叱咤す母は」
「ギブス痛しと油汗かきて泣く子故 カッカ（母親）も共に業病と泣く」
「舌の先いとけなければわが指に ひきて右左に曲げて見るかも」

(3)「米一升運動」の時代（昭和37(1962)年～）<ミサヲ64歳～、孫6歳～>

○ 一粒の麦、捨身の願い

リハビリ等、血のにじむような苦行の結果、障害の孫は徐々に歩き出し片言も話すようになった。そして学齢に達するが、就学には大きな壁が立ちだした。それは障害児の「就学猶予」である。ミサヲは「これは体裁のよい就学拒否である」と考えた。

ミサヲは婦人会の役員をしていたが、その組織である上越婦人協議会の組織を土台にして、孫を含めこれらの不幸な子どもたちの療育機関を作ろうと考えた。それが、昭和37年に創設された上越心身障害児療育機関設置期成同盟会である。昭和38年に当時の就学猶予児を調査したところ、上越地区には511人いることが確認された。

この目的を達成するためになされた一連の活動は「米一升運動」であり、長く語り継がれているのでここでは省略する（センター紀要第27巻参照）。なお高田養護学校は昭和43年5月1日に開校した。

ところで、遺品作品ではこの時代のものはほとんど発見されなかった。高田養護学校の「周年記念誌」や自費出版の歌集「来し方（捨身の願い）」に、すでにミサヲの心情がよく詠み込まれ公表されているからであろうか。

「一粒の麦たらんとて或る一夜 捨身の願い固めけるかも」
（「周年記念誌」「来し方」）

この時代のミサヲの心情は、正に自らが「一粒の麦」となり「捨身の願い」で療育機関の創設に打ち込んだのであった。

付け足したが、ミサヲはこの運動を始める前には上越婦人会館の建設運動に携わった（昭和36年に設立）。また、昭和39年1月に最愛の伴侶（秀雄）を亡くしている。彼女を取り巻くこの厳しい環境の中で、身を粉にして「米一升運動」に邁進したミサヲであった。

(4) 大願成就、孫の養護学校時代（昭和43(1968)年～）<ミサヲ70歳～、孫11歳～>

○ 喜びの極み

高田養護学校の創設は、ミサヲの人生で最大の喜び（大願成就）であった。遺品作品ではこの喜びの歌は発見されなかったが、「周年記念誌（創立五周年）」にはその心情がよく表されている。願いの成就が近づくと「暁に近しと知れば今日の日の命の血汐たぎりそむかな」と詠んだし、開校式には「殿堂はついに成りけり喜びの 極みの涙に光る柏楊」と詠んだ。そして「結願の像（記念碑）」には「燃り合えば母の毛綱は強かりき この子呂の家かくも建ちけり」とミサヲの歌が刻まれている。なお、歌集「来し方（捨身の願ひ）」にも養護学校関係の歌が9首納められている。

ここでミサヲは一息つくのであるが、この時代、過去を振り返る遺品作品が発見されている。また、障害者のためのコロニー建設に携わった歌が多く発見されている。

○ 宿業：またこの想いを引きずる（「夫にささぐ『手向草』」2首抽出、「秋にうたえる」2首抽出、「宿業」18首抽出）

障害のある孫たちのための殿堂は建ったが、互いに手を取り合って育もうと誓った亡き夫への恋情がミサヲの心を揺さぶる。

「障害の孫（こ）を宿業と長生きて 見んと言いしに我に残せる」（夫にささぐ『手向草』）

「マヒの孫の悩みたかぶり彼岸花 咲く墓のべにかがまりて泣く」（秋にうたえる）

このころ、孫の気持ちが時々荒れるようになったと遺品作品にある。歌集「来し方（宿業）」でも孫の心荒れる様子が詠み込まれているが、これも宿業なのか。ただし、昭和45年ころの作品と表示されているが、孫がまだ就学時なので、時代については再吟味も必要である。

「宿命か掟か非ず悪業か 肉親の孫に喉めめらるゝ」（宿業）
「沸りたつ湯わかし投ぐと吾を 憎む眼ぞそら恐ろしき」（宿業）
「ヒョウヒョウと夜風過ぐるに寒く堪え 追う孫を逃げて闇に嘆けり」（宿業）
「落ち着けばまたよき孫なり孫が為に 春の旅出のおにぎり包む」（宿業）
「かゝるをば業とし言はむ 死ねと言はれ 寝ぬれば夜具の脊なをなずるも」（宿業）
「生甲斐は業を果たすにありといふ 余り哀れの誦めと言はむ」（宿業）

○ 孫の将来を托すか：コロニー建設に関わって（「コロニー献金を終えて」4首抽出、「コロニー起工式にゆく途」11首抽出、「コロニー開所式に臨みて」8首抽出）

ミサヲは孫の成長を見つめながら、障害者の福祉向上のために社会福祉行政にも深い関心を寄せた。その一つが「コロニーにいがた白岩の里」の建設である。彼女はコロニー建設委員として資金集め等に関わったようだ。完成後は、「将来の孫の居場所か」という考えもふと脳裏をよぎったようである。

「コロニーの建設かけて吾が命 この一と年を燃えてあり希里」（コロニー献金を終えて）
「1000万の金を納めぬ女らの 思ひ籠ればおろそかならず」（コロニー献金を終えて）
「烏二羽嘴寄せ合ひて畔に在り 梅雨にぬるゝをいたはり合ふか」（コロニー起工式にゆく途）
「薬玉は破られにけりかゝる子ろに 幸希ふ千羽鶴かも」（コロニー起工式にゆく途）
「数重ね

集いて究めつくしたる 大き計い欠くることなし (建設委員として) (コロニー開所式に臨みて) 「己が孫も白岩の里に托さんと 思ひ定めて静かに歩く (見学) (コロニー開所式に臨みて)

○ いささかの灯か：旅は楽しいのだが (「北海道の旅」2首抽出、「旅の歌(2)コロニー見学 高田養護学校PTA」7首抽出)

ミサヲは旅が多い。仲間は寺関係、女教師関係、歌人関係、婦人会関係、PTA関係と多岐にわたる。その旅の先々で多くの歌を詠んだが、孫にまつわる歌も多い。

「亡き夫も子も孫も待つ吾寺に 僅かのみやげ提げて帰るも」(北海道の旅)

高田養護学校PTAでは、昭和46年10月に「コロニー見学」を行った。この見学の旅で詠んだ歌がある。日常の苦労を一瞬忘れ旅情に浸るのがだ、その先に少しの灯がともされるのだろうか。

「もろもろの善意は強しこの子呂の 幸を希ひて館建ちけり」(「神さびし彌彦山に詣でしに 桜もみじに小雨そぼ降る」)

「安来節もやがて流れて帰り来る バスは楽しも不幸は思はず」(「ひねもすを雨ふり止まず暮れしかど いささかの灯り兆すを覚ゆ」)

(5) 孫の社会参加と自立に悩む時代 (昭和49(1974)年～) <ミサヲ76歳～, 孫17歳～>

○ 嬉しき就職：作業衣をまとう孫 (「雑詠(3)」の「秀頭卒業就職」6首抽出)

ミサヲの孫は昭和49年3月に高田養護学校中学部を卒業した。ミサヲはこの瞬間が待ち遠しかった。いよいよ障害のある孫が就労するのだ。彼の社会自立の日が来たのだ。

「詰襟の学生服をぬぎ更えて 作業衣まとふ孫となりけり」(「作業衣の折目正しきを身につけて 孫は就職の初日をいそぐ」(「来し方」に酷似歌) 「同僚の人みなよくて優しきを夕餉うれしき話題とはなす」(「来し方」に酷似歌) 「特大の弁当箱の重たきを 提げて通ふ日続けと祈る」)

○ 荒れる孫に心痛む：荒れたり家出したりの孫 (「雑詠(1),(3)」11首抽出、「孫」10首抽出、「狂ふ孫」21首抽出、「秀頭家出す」4首抽出)

孫の就労を喜んだミサヲであったが、彼の体調不良等の理由でその道は険しくなった。家で過ごす日も多くなり、また心が荒れる日も多くなった。そして家出さえもする。そんな孫の姿に心を痛める日々が続く。

「恥もなく十八才の青春を もて余し居て孫は荒れ狂ふ」(「狂ふ孫」) 「背に乗りて咽喉しめ来れば老いの身に 抗ふ力虫ほどもなし」(「狂ふ孫」) 「内陣の丸柱のかげに身をひそめ 孫が狂えたと避けて泣きける」(「雑詠」) 「腹空きているらん足も疲るらん いづこほつつきさわざてあらん」(「秀頭家出す」) 「路銀なしと乞食のごと警察に 救ひ求めてあはれ彼の孫は」(孫)

(6) 老いの悲哀を見つめる時代 (昭和50(1975)年代後半～) <ミサヲ80歳代～, 孫20歳代～>

○ さみし：障害の孫と暮らしながら老いる身のさみしさ (「暁の鐘」9首抽出、「永き別れ」1首抽出、「初秋の譜」2首抽出、「詠草」の原稿用紙8首抽出)

何事にも常に第一線に立ち、社会奉仕的な活動の多いミサヲ

であったが、齢を重ね老いて来た。長男文秀氏によれば、「母は昭和44年11月、勲五等瑞宝章の叙勲を受けたが、これを機に一切の公職を辞する決意をしたようだ」と述べている。

遺品作品では、ミサヲ80歳ころからの老境のさみしさと孫の将来への想い、そして孫に支えられながら生きる様子を詠んだ歌が多数発見された。

「年越しのそば喰べませと湯の老いを 足し呉るゝ麻痺の孫優し」(「暁の鐘」) 「この孫もすでに髯さえ蓄えぬ 青春みちて眠れば愛し」(「暁の鐘」) 「障害の孫は傍に寝せ年纏いぬ 畢命にこの孫誰に添はんや」(永き別れ) 「かばい合ひ障害の男女歩きゆく 秋の巷にほのかなるもの」(初秋の譜) 「孤独なる吾に親しき障害孫と犬と 一と日のうちの語ろふ相手」(詠草) 「障害の孫と老い我と籠り居て 甘酒匂ふ座の人声を恋ふ」(詠草) 「障害の孫の言語の語り聞く 世間を覗く唯一の窓か」(詠草) 「或時にポツリ『さみし』と告ぐる孫も むべ青春の齢を生ける」(詠草)

○ 孫に救われみ仏の元へ：孫を心配しながらみ仏の元へ旅立つ (「来し方」(一・二) 雑記・歌川衣子, 97歳, 平成7年ノートから48首抽出)

今回の遺品作品からは、晩年の歌や短文で綴られたノートが1冊発見された。そこには、最期まで歌に執着したミサヲの心情が垣間見える。作品は、障害の孫との確執もありながら、彼に支えられて生きる日常の歌がある。また、自らの老いを見つめる寂しい歌も多い。

長男文秀氏によれば、「母は高齢になっても町の仕事は続けたし、僧侶の仕事も米寿くらいまでは続けた。90歳過ぎたころから母の身边は次第に寂しさの色が濃くなったが、それでも終生の趣味であった和歌と謡曲に心を慰め、体調のよいときには境内で草むしりをするこももあった」という。

平成10年2月9日、満百歳の誕生日には、県知事祝詞の伝達をする町長の表敬訪問を受けて大変喜んだという。その頃は、身体の自由もあまり利かず、自身の部屋で孫と過ごすことが多かったようだ。

「障害の孫が煮て呉るかゆ一椀 それにこの夜の命をつなぐ」(雑記平7.8.25夜) 「この孫に諫言なせば怒りもて『おにばば』と叫び老いを打ちくる」(雑記平8.25夜) 「『おばあちゃん掃除終わった』と呼びおこす 孫の若かき声我を勢ひさす」(雑記平9.11) 「朝風くを起き出て老ひに目玉焼き 焼き崩れしをわぶる孫愛し」(雑記平9.11) 「ひげすりて撫でて見よとて顔寄する 朝のこの子もやがて四十路か」(雑記平10.27) 「独り身の男盛りのこの孫の 世過ぎはかくも寂しかりけり」(雑記平10.27) 「障害の孫をさえ吾れの一日の 語らふ友と頼りとはする」(雑記平12.3) 「パンと乳置きて出てゆくこの孫の 情ひ優しむ朝おそき床」(雑記平12.9) 「明日は又寂しき一と日と共にゐて 生きんとすべし命続けて」(雑記平8.9.14) 「百齢に近き齢に未だ生きて 何かよき事来るかと待てり」(雑記平9.14)

長男文秀氏によれば、ミサヲは本堂の仏前に座して合掌する姿が目立つようになったという。このころの歌は多数あるが、以下のようなものを代表として記す。

「み佛のもとへ白寿はやがてゆく 南無阿弥陀仏ククククク」(雑記平8.11.1) 「十二月聊かの雪もゆらぎなき 珍らか

にして吾九十八」(雑記平12.31)「百歳をよくぞ生きたり命ある限りを法のみ教え享けて」(雑記平9.2.26)

遺品作品の最後と思われる歌が以下である。

「明日は二人揃ひて病みて老ゆる母 昭(子)義(子)との並揃ひ訪とふや」(雑記平4.22)

なお、西念寺報「慈光」第93号(平成13(2001)年)には、「『こいよ、こいよ』と呼んで下さるみ仏のおそばに参るきょうのうれしさ」と歌を口述し、その1か月後静かに旅だったと記されている。筆者らの心に強く残る歌だが、これが遺詠だったようだ。

4 まとめ

徳山ミサヲの遺品作品の時代区分と、その時々々のミサヲの心情の整理を行った結果気付いた点について以下にまとめた。

- ・ 遺品作品の時代考証は困難なものであったが、抽出作品はおおよその見当はできた。ただ、今後吟味すべき作品もある。
- ・ ミサヲは歌について、「私には作歌で正式に師事した先生はいない」「少女期から百人一首を暗記したり貝合わせの恋の歌をうろ覚えしたりした」と「来し方」で述べている。それを芽とし、女子師範学校時代や女教師時代も歌に触れ、更に歌人会に所属して歌の道に進進し、このような多数の歌を残したのであろう。
- ・ 今回、テーマに沿って抽出した作品からは、時代に添ったミサヲの心情の変化がある程度鮮明に浮き彫りされた。
- ・ ミサヲが弱者に寄せる心情は、女教師時代の歌からもすでに鮮明である。
- ・ 障害のある孫の誕生では「宿業」として嘆き、生母の失踪についても嘆き期間はあったが、しかし自らが母親代わりとなる決断をする。そして孫の病原をさぐりながら灯はないかと病院を巡り歩き、診断が下ると今度はそのリハビリのため、世捨て人の心情で孫と「はまぐみ」に籠る(母子入園)。そこでは、ただたださみしい歌を詠み続けた。
- ・ リハビリの結果、孫は少しずつ成長を遂げるが、学齢になっても「就学猶予」で学校にいけない。孫を含めたそんな不幸な子ども達のための療育機関を作ろうと、「米一升運動」を展開する。ミサヲは「一粒の麦」「捨身の願い」の心境で活動し、結果として高田養護学校の創設に漕ぎ着ける。しかし、遺品作品ではこの時代の歌は発見されなかった。それは高田養護学校の「周年記念誌」や自費出版の歌集「来し方」などで心情をすでに十分に公表しているからであろう。
- ・ ミサヲにとって高田養護学校の創設は「大願成就」という喜びの極みであった。この心情はやはり「周年記念誌」に詠われている。一息ついたが、この運動の最中で亡くなった夫への恋情、そしてまた「宿業」が心の奥底で騒ぐ。遺品作品では、孫の荒れるようすがこのころから詠われているが、これについての時代考証は少し検討すべきだ。
- ・ ミサヲの心は、障害者の社会福祉事業に移る。コロニー建設に関与するが、これにも「婦人会館の建設」や「高田養護学校の創設」に傾けた弱者への想いや奉仕精神が伺える。完成後は、孫を托す場所かとのミサヲの心情も詠める。

高田養護学校PTAでコロニー見学の旅をした後、親たちは屈託がない。いささかの灯が垣間見えたのだろうか。

- ・ 孫が卒業した。嬉しい就労の日が来たのだ。しかしこれはつかの間の喜びだったようだ。就労の継続がうまくゆかず、孫の心は荒れてくる。そして家出もする。その様子にミサヲの心が強く痛む。
- ・ ミサヲは老いて来た。老いのさみしさを感じながらも確執のある孫と共に暮らす。孫の存在は命を繋ぐ支えでもあり世間を覗くアンテナでもあると詠んだ。
- ・ そして、み仏の元へ旅立つ覚悟をする。ミサヲの最期の歌は、孫を心配しながらも、さみしく静かに己を見つめる心境が厳しく詠まれている。これらは、筆者も含め、読者の胸に痛く強く迫る歌に違いない。

5 おわりに

本稿のミサヲ遺品作品の時代区分と心情の整理は、一つの試みであり完結したものではない。しかし、抽出した約300首の作品からは、時代とともに揺れ動くミサヲの心情を探ることができた。

障害のある孫に焦点を当てて詠んだ歌や彼を取り巻く家族や周囲の状況の歌は、ミサヲが述べているように、全体的に嘆きや悲哀を感じさせる。しかし、障害のある孫の課題解決のために身命を賭して事に当たってきた強い信念(執念ともいべき心)の姿は、歌に良く表われている。

ミサヲは当時としては相当な長寿であった。その死の直前まで、孫を心配しながらも彼を愛しみ、同時に自らの生きる糧を得ていた。ミサヲは平成13年3月16日、川室記念病院で103歳の生涯を閉じた。孫の秀顕はその3年後、平成16年5月22日に死去した。彼は享年46歳であった。

ミサヲの死からすでに20年余となるが、その時々々の自らの心情を、これほどまでに鮮やかに歌に表現した人は身近にいない。ミサヲは「……数は多いけれど名歌も絶詠もありません。しかし人の心を打つものは吾が心であり短歌は吾が心の表現以外の何ものでもないと信じております。……」(歌集「来し方」)と述べている。そのように、ミサヲは他人の心を強烈に打つ歌人だったのではないだろうか。

ミサヲの遺品作品整理はまだまだ道半ばである。筆者らは今後もミサヲの歌の調査・研究を進めていきたいと考えている。そして、真の障害児教育や福祉行政の在り方を、ミサヲの心情を通して学んでいきたいと思う。

(注：歌の表記等は原文を尊重しました。)

参考文献

- 丸山昭生・小杉敏勝・笠原芳隆(2021) 徳山ミサヲ, 障害のある孫への想いを短歌から読み解くー同人誌や遺品作品等の調査からー. 上越教育大学特別支援教育実践センター紀要, 27, 41-46.
- 新潟県立高田養護学校(1972) 創立五周年校舎竣工記念誌. 文化印刷.
- 徳山ミサヲ(1976) 歌集「来し方」. 澤田印刷.